



理事会だより (6・8)

- 一、令和五年度小田原秋季俳句大会(十月十五日)について 事業部から①実施細目の確認 ②小田原市へ市長賞・教育長賞・市議会議長賞申請中 ③投句案内を本日配布・発信(協会員外へ百五七通)との報告
  - 二、秋の吟行会は十一月一日(水)に大雄山最乗寺にて実施することに、細目は次月以降。(会計部)
  - 三、各部報告 総務部・小田原市生涯学習センターおよびおだわら市民交流センターへ団体登録済。広報部・協会報原稿協力をお願い 会計部・年会費受入れほぼ完了。
  - 四、会員増加へ取組中のおほる俳句会の小野代表より準備会にて内容の説明を受け、意見交換をした旨會長から報告。
- (訂正) 5月号理事会だよりの定期総会は70回が正当です。

「俳句おだわら」10句抄 (670号より)

小野 菊土 抄出

勢子の意の操るままに野火奔る  
朝刊の読まざるままの春炬燵  
春雷や呪まじないかけて探し物  
旅心そつと擲る春の風

蒲公英の旅立つ構え風を待つ  
春耕や余生を土に癒されて

水温むなんでも真似るみそつかす  
卒業歌楽譜にのらぬ和音あり

もののふの無念の形なりに落椿  
使はざる筋力のありつくしんぼ

齊藤 桂 抄出

花冷や水面に揺らぐ角櫓

寺町の寺から寺へうかれ猫

芽柳や絹のスカートゆるく捲く

濃く淡く刻の流れる藤の下

掘り返す鋏になじみし春の土

余寒なほ独り暮らしの長電話

採血のあとの絆創膏ばんそうこ山笑ふ

新緑や溪水滾る養魚場

誰かれと糸電話せん朧の夜

いちぶしじゅう鳶の見ている春の浜

近藤 久江

伊藤はる子

片野 節子

高橋みどり

廣田 悦子

小宮 早苗

一ノ瀬茂代

須田 聡子

田畑ヒロ子

山田 照子

川本 育子

尾崎 一夫

豊田 幸枝

石井千代子

田渕 令子

田中 幸子

西賀 久實

庄司 下載

伊藤 道郎

小澤 園子

夏野原 加藤かほる

ほっと息吐いて玉葱抜かれけり  
 自己主張強くて風鈴仕舞われる  
 本当の息存分に夏野原  
 飛び降りる頃合い計っている実梅  
 この地球を憂う眼差し梅雨の月  
 蛞蝓の夢家いつも虹描いて  
 城垣の蜥蜴時々ワープする  
 どう生きる問われ長考かたつむり  
 愛されず己が長身厭う蛇  
 進化とは自問し瞑想長き墓

春は塩っぱし 伊藤道郎

春は塩っぱし青年海へトランペット  
 廃校の語り部である古い桜  
 死者も来て夜にはじまる桜狩  
 体温に遠浅のあり臍の夜  
 恋するピアフときにかなしきひばり  
 ふり向けば野に恋猫のほくだった  
 縄文の芽吹き山吹火焰土器  
 はつなつの山毛櫨縄文の青き性  
 鳥雲に将棋くずしの擦過音  
 曲がること知らずに育つつくしんば

俳句おだわら(6・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(5・26)

久江報

緑さすまばらに光る石畳

足立 和子

文字摺の空を支ふる心意気

川本 育子

青葉潮しじら織見るとときかな

高橋 小糸

風鈴の音色ふくらむ夕べかな

山崎 悦子

若葉風魚板のくぼみ撫で行けり

近藤 久江

◆香雨・梅ごち(5・28)

忠山報

新緑や水辺歩けば鳥のこゑ

肥後ちさこ

雨雫はね返りては枇杷熟るる

関戸わよこ

風にのり風をなだめてヨットゆく

青山 典子

江戸つ子の何はなくとも初鯉

門松 鳳文

雨音の小さく大きく梅雨に入る

吉田 百代

十葉や幼なきころの傷のあと

吉田 康雄

枇杷たわわ鳥入れ替はり立ちかはり

陌間みどり

早苗田や風のほかには村しづか

小澤 純子

風薫る染筆の透く色紙掛け

池田 忠山

◆こよろぎ(6・8)

つとむ報

代掻けば田にさざなみの立ちにけり

高杉掘三朗

青嵐 須田聡子

あぢさゐの葉蔭はやさし猫の径  
 夫の忌来四葩の藍のととのひぬ  
 木々の風水面うつろふ半夏生  
 老樹とはひとの裁量天清和  
 樹木葬決めたる人か桜の実  
 ハンカチの木や湘南の風光る  
 なんじやもんじやの花の白さよ夏帽子  
 神木の影は美し蝸牛  
 あぢさゐの彩をかかげる葉のみどり  
 迷宮へスマホの世界青嵐

しのぶれど 川本育子

淡き緋の『しのぶれど』てふ薔薇かな  
 薔薇園の薔薇の小道の香におぼれ  
 王座めくベンチ真中に薔薇の園  
 薔薇園のガイド美し昼下り  
 願はくは新種の薔薇の名付け親  
 薫風や蜂蜜王子てふ売子  
 夏めくや蜂避け帽の揺らぐ網  
 遠心機よりの蜂蜜初夏の色  
 搾りたての蜂蜜の味青あらし  
 蜂蜜酒の試飲三回り走り梅雨

水面触れ踊る草の葉雨蛙  
 集落のだんだん畑麦は穂に  
 小満や野に土の香と草の香と  
 ◆青梅(6・7)  
 牡丹咲く庭の主役となりけり  
 孫と子と犬もお供の田植飯  
 突き当たる天の高さや今年竹  
 さざなみを立てて朝の代田かな  
 磴のぼる天狗の下駄も梅雨じめり  
 初蛙地物づくしの夕餉かな  
 ◆春野(5・21)  
 栗の花空寂々と匂ひ来る  
 雷鳴や再放送のサスペンス  
 迂闊にも本心洩らす夕端居  
 毛虫焼く歳を忘るるほど生きて  
 五月闇心の闇は別にあり  
 百年の杉戸の艶や走り梅雨  
 ウクライナの侵攻十葉の越境  
 ◆みなみ(5・20)  
 若葉照り山のふくらむ雨上がり  
 薫風や朝日背にして畑仕事  
 板谷 雅泉  
 植松テル子  
 神山つとむ  
 幸子報  
 大塚 行人  
 湯本とし子  
 加藤まり子  
 久保寺トミ子  
 田淵 令子  
 田中 幸子  
 きよ志報  
 秋山 昇  
 伊藤はる子  
 内田知江子  
 尾崎 一夫  
 瀬戸 悠  
 二見 和江  
 長谷川きよ志  
 かほる報  
 加藤 健治  
 市川めぐみ

梅雨明 陌間みどり

濡れてゐる松の上枝に梅雨の月  
 荒梅雨や暗渠を走る水の音  
 形代を少し沈めて通り雨  
 人に倦み雨を親しく半夏生  
 空ぢゆうの雨ぶちまけて送り梅雨  
 思はざる鴉の美声つゆの明  
 水無月の御手洗水を溢れしめ  
 滴りや静寂しじまの中の黙もだの音  
 夜濯や一等星に干す道着  
 悩みなど取るに足らぬと滝直下

蟻の勇氣 田中幸子

地雷なき土のやはらか葱坊主  
 竹の子や屋敷墓守る十代目  
 みどりの日血管五臓の丸洗ひ  
 兄ちゃんの秘密大基地柿若葉  
 葱坊主道草してる五人組  
 川下へ風を道連れ里若葉  
 ホームランかつ飛ばして立夏かな  
 はじめての老いの坂です心太  
 犬掻きの記憶の川巾広かつた  
 隊列をはなれる蟻の勇氣かな

柿若葉掴まり立ちの出来た朝  
 若葉光太い白緒の男下駄  
 母と子の心を繋ぐカーネーション  
 レジ並ぶ男の籠にカーネーション  
 さらさらと世代交代樟若葉  
 カーネーションちよつと奮発してワイン  
 白カーネーション今なら出来る親孝行  
 ◆沈丁(6・1)  
 白日の石ころ笑ふ青葉風  
 万緑にいままだ句帳は眞白なり  
 青梅を拾ひ放さぬこの幼な  
 十葉が天使に見える母亡き日  
 梅雨に入るここは象舎のあつた場所  
 紫陽花やどの径行けど古戦場  
 仲直り明日は出来さう花菖蒲  
 紫陽花に埋まる城垣小田原城  
 丹の橋のたもと展けり花菖蒲  
 片陰や風の睡ねむたさはしやくぐ声  
 カテキンを胸いつばいに茶島よ  
 あの頃を誇る城址の松落葉  
 梅雨の鯉ゆらりと泳ぐ杉屏風

豊田 幸枝  
 斉藤 静  
 小瀬村信子  
 柳川 紀枝  
 加藤 富江  
 加藤れい子  
 加藤かほる  
 寶子山報  
 若村 京子  
 柳澤ミサ子  
 田中 恵一  
 河本 純子  
 瀧本 敦子  
 勝木 澄子  
 菅野 英余  
 高井 幸子  
 片野 節子  
 峯尾ユキエ  
 清水美代子  
 松下 俊之  
 武居裕美子

てらてら 寶子山京子

みどりなすサンチュ・ルッコラ誰からいく  
 小臭木の新葉てらてら二百段  
 恋すてふなんて茨の花引つ張る  
 アフリカ浜木綿こんこんと水流れてる  
 はたた神ひがなとろ火を構ひたる  
 阿でもなく峠でもなくて夏蜜柑  
 ゐないうちいつぱい溜まるからす麦  
 青梅がとんとナナムギナマタマゴ  
 珈琲に水を差したよ黒鳳蝶あひは  
 だめ出しのやうな雨です玉あぢさゐ

青田道 古屋徳男

稜線の曖昧模糊や草矢打つ  
 雨あとの池の眩しき茅の輪かな  
 袋掛鴉啼かぬもまた不安  
 菖蒲園傘をかしげて行き違ふ  
 老鶯や鎌にからみし草払ふ  
 通し鴨葉先に雨滴ふくらめり  
 富士に光放つ朝日や青田道  
 品書きに和歌の添筆つりしのお  
 欄ありて短き橋や蓮の花  
 吹き晴れて山の色濃き曝書かな

歡びはいつにも増して花菖蒲

◆たけのこ(6・5)

悦女報

寶子山京子

新緑に包まれ真赤な太鼓橋

三木 泰子

夫と行く雨の農道四葩咲く

徳田 公子

幼犬の捕へそこねし夏の蝶

小宮 早苗

浜風が肩をなでゆく左富士

久津間百合子

青空と涙を少しさくらんぼ

宮崎 悦女

◆山北(5・25)

由里子報

幼児の笑って見せる夏帽子

和田恵美子

敗戦から一途の民やみどりの日

尾崎 幸子

大ぶりの碗に山盛り豆御飯

星 一義

路地裏の手作りの靴クレマチス

石田加津子

夕薄暑ボンチャイナの把手とれ

竹下由里子

◆零(6・15)

史郎報

箱根路の雨に濡れ行く四葩かな

青木たけを

網戸ヲ外セ満月のささやける

伊藤 道郎

指きりのその後それきり合歡の花

川合 昌子

蚊の姥や打ちのめされる思いあり

木村 和彦

倒木の葉を養やう青時雨

佐藤 正子

S L復活初夏の正夢御殿場線

中村 裕子

野川木一路

万緑だ寝釈迦めく箱根連山

岡本 史郎

海に向く薔薇のアーチや鐘鳴らす

青木 孝子

◆実のり(6・15)

たか志報

五月雨を聞き朝刊の拾ひ読み

池田 令子

鮎解禁眠れぬ夜の太公望

岩本ひさみ

卯の花や箱根旧道一里塚

西賀 久實

水神も富士山も見守る田植えかな

杉本 久子

店先に薪積むピザ屋街薄暑

佐宗 欣二

鮎釣りの律々しき姿朝まだき

木村 幸枝

朝焼やサーフショップの風向計

須田 晴美

鮎跳ねて光を撥ねて水匆ねて

新井たか志

卯の花や黒船見張る番所跡

中田 笑子

◆おほる(6・14)

秀泰報

衣更へて会計監査担ひけり

百川 秀子

荒梅雨の洗ひ上げたる青山河

横塚 昌平

花卯木割烹店の若女将

山崎美知子

梅雨晴間富士白妙の衣干す

香川 花子

開発に残す緑や兜虫

柏木 良花

雨上がり昼顔の笑み弾けたり

二上 光子

新発意の青き頭や若葉風

庄司 下載

農具小屋雨音強き梅雨に入る

中津川晴江

伽羅路や眩しき母の割烹着

瀬戸 りん

雨上り田に滑べるもの泳ぐもの

小野 菊土

柿若葉ひと日細かく働きぬ

高橋久美子

列島に避難指示多々梅雨荒し

中村 昌男

白墨にしるす区割や夜店の灯

中山智津子

梅雨出水確と踏ん張る土手の松

中根登美子

読書灯夜汽車に点す帰省かな

齊藤 桂

銀輪を留めて地図見る人に汗

石井きよ子

水底を靡く藻草や祭来ぬ

芹澤 常子

籠もる日の薔薇一輪の和みかな

高橋みどり

真剣に取り組む写経風五月

大木 敬子

空しさをそつとなでてく青田風

瀬戸とみ子

絵画展出づ楠若葉楠若葉

大島美恵子

父の日や大笑いして寂寥

加藤 春江

甚平や五目並べの顔と顔

田下 昌人

梅雨晴間返信葉書出席に

廣田 悦子

夏雲や網を繕ふ猟師の背

中根 和子

辞書にない生き方もあり余り苗

石井千代子

旅果ての富士の笠雲夏夕べ

加藤 幾代

◆鷹(6・3)

十五報

山間を登る歩荷の荷にビール

高橋千代子

父の日や珍味を囲む家族連れ

風間 秀泰

旅行記に惹かれ貴船の川床へ

守屋 まち

夕映の厨の窓や鱒を割く

行列の先が見えぬや富士詣

掘りたての新じゃが筈に長話

長梅雨やトリセツ開く厨窓

制服を脱ぎて大の字金魚鉢

薔薇の園傭三人笑いけり

丸盆の寄木細工や時鳥

境内の矮鶏にふり向く茅の輪かな

祭足袋ほか一式を仕舞ひけり

◆草むら(6・19)

青梅や車手放す覚悟せり

真夜中や精霊蟋蟀最前列

草取媼髻は天向く高みかな

◆無所属

さくらんぼ卒寿の夫の片えくぼ

浦島草海をはるかに糸垂らす

花みかん海べつたりと暮れゆける

初燕すぐに返信メール来る

善き人は先に逝くらし額の花

赤はヒト青は幼きトマトかな

台風の近づいているたぬき饅飴

白髪太郎と呼んで愛せよその毛虫

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

重満報

石井 秀稀

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

一ノ瀬茂代

島 梅乃

出澤 洋子

大佐田うづき

木村美千代

大石 雄介

大石 和子

運転さ中地震アラーム梅雨さざす

輝けるルビーを以てさくらんぼ

下校時若き乳房や夏来たる

青葉梟鳴くたび青き闇深む

採血の針のとまどふ梅雨の腕

スイッチもナースまかせの五月場所

五月雨で単純でいい恋なんて

雲海に浮かぶ函嶺梅雨の晴れ

梅雨さざす小田原提灯駄雑踏

青柿や少年という未成熟

風景画の次は自画像夏帽子

梅雨入りや着替えを乗せて三輪車

種袋おまけのやうに買ひたして

卯の花の八重咲く新種庭石に

浴槽に寝そべる首のないキリン

桐箱やただ見るだけのさくらんぼ

春眠し言い訳してもしなくても

グランドキヤニオン駒鳥のホバリング

5、6月号追加

へちま棚とほき遺産や布おむつ

流水で冷凍みかんシャーベット

青木 勝子

山口 千代

山本 すみ

田畑ヒロ子

山田 照子

神野美代子

穂坂志げる

須田 聡子

岩楯惠津子

小澤 園子

瀬戸 正洋

岡田 典代

北村 文江

蓑宮 わか

小島ノブヨシ

柴田 礼子

杉山あけみ

杉崎 せつ

柴田 礼子

〃

〃

〃

菅野 英余

(令和5年4月号)

太陽の私信が届くいぬふぐり

木村 和彦

空色の可愛い花。なのに名前がちょっとユニークな犬ふぐり。お日様、お天道様。万物にとつて重要な存在の太陽。私信。私的な連絡、内密な話。犬ふぐりに届いたのはエールかそれとも愛の告白か。

なんだか羨しい。そして朝日に花を開き夕にはしほむ犬ふぐりを眺め幸せな気持ちになった。いつか私にも何処からか素敵な私信が届くと良いなあ。

吉田 康雄

(令和5年4月号)

春一番明けの海原汚しけり

田淵 令子

昨日は、明るくゆったりとしていた海原が今朝は荒浪で汚れたように変っている。

春一番が原因である。汚しけり、という表現から、相当に強い春一番であったことが想像できる。海面の様相の変化を上手に表現している。明日はまた、ゆったりした春の海に戻ることであろう。人間社会にも同様な場面がありうると思った。

山本 すみ

(令和5年4月号)

すれ違ひの香懐かしや春の月

柏木 良花

長い人生に人は皆多くの人に出逢います。そして通り過ぎ、又すれ違ひ振り返り、その日々の一齣に「あれ、と感じるのが行きずりの香です。五感に残る本能が目覚めます。故に去り行く人を想像し、香りを風と共に懐かしみます。

生々しさの無い、良い嗜みの素敵な句に出逢えました。

池田 令子

(令和5年5月号)

耳朶に真珠ひとつぶ卒業す

畠 梅乃

真珠という宝石の魅力は品位だと思う。普段は色々な素材のイヤリングやピアスでも改まった場面では真珠のものをつけることが多い。

昨今珍しくない、ピアスをつけて学校へ通う高校生も卒業式だからと自分なりに考えて真珠を選んだのではないだろうか。その小さな粒の控えめな光が彼らの未来を静かに励ましているように思える。

ひとつぶ、と平仮名にしたのも心地よく句を整えている。



久津間百合子

(令和5年5月号)

旅心そつと擽る春の風

高橋みどり

振り返れば、突然感染力の強い未曾有の病気が蔓延し、日本のみならず世界中の人達がコロナに翻弄された。今は予断を許さないものの、少しずつ落ち着き始めた。

三寒四温を感じ始めた春の風、今まで忘れかけていた旅に出たいという気持ち徐徐に心の中に広がりはじめた。私も同感です。

こらからの余生、一日も長く元気に思いのまゝ送って下さい。

中根 和子

(令和5年5月号)

やつと鳴る雀の鉄砲十本め

小林永以子

「鳴って良かった。努力の賜物ですね。」何を隠そう、私も先日畑帰りの畔で、一人こっそり吹いていました。口に当てると体が覚えていてすぐにコツが蘇り、高い草笛の音に何とも言えない懐かしさと嬉しさが込み上げてきました。目を瞑ると遠い記憶の中の山河や通学路が思い浮かびました。「雀の鉄砲」の一つの季語から多々連想され、楽しい思いが広がりました。

## 新作5句

加藤 健治

長梅雨や軋む雨戸に蹴りを入れ  
太宰忌や部屋に干したるシャツズボン  
富士映る忍野の水や新米汲む  
夏帽の鍔つばの向かうの奥穂高  
蛭追ひ踏み抜く水にはまりけり

木村予史重

祖父逝きて南洋桜と戦地知る  
恒久の平和の礎いし沖繩忌  
語りべも齡よ重ねて細る夏  
向日葵に問うは世界の向かう先  
戦いを止めるすべなく夏は来ぬ

佐藤 正子

樹木葬ありしかなとは夏の星  
参道に夏風うけて天狗下駄  
大和絵に過去から未来沖繩忌  
夏蝶や遙か旅路の八ヶ岳  
登らねば街で聞こえぬ仏法僧

(情報提供) 「自分時間手帖2023」(小田原市・小田原市教育委員会発行) に小田原俳句協会と次のグループが登録し活動内容を紹介しています。

沈丁俳句会、零俳句会、鷹俳句会・小田原、「春野」小田原句会

# 令和5年度小田原秋季俳句大会

## 第二部 作品募集

兼題 「星月夜」「花野」(いずれも傍題可) 各一句

一組 未発表作品に限る。

締切 令和五年八月四日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0851 小田原市曾比二四三二

米山 翠苑(☎〇四六五―三六―四五九〇)

\*作品は投句原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。

\*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家

賞 小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

## 第二部 俳句大会

日時 令和五年十月十五日(日)

会場 おだわら市民交流センター(通称UMECO)

受付 十一時 投句締切十二時

開会十二時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑誌二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位

\*お願い 会場では飲食可能です。

参加人数が多数見込まれますので、感染防止対策にご協力下さい。

★当協会員で令和四年十月三日(令和4年度秋季俳句大会翌日)から五年十月十五日(秋季大会当日)に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行いますので該当者は奮ってご投句下さい。(表彰は投句条件)

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

## 木村幸枝

(令和5年5月号)

駄菓子屋に猫の子囲む声朗ら

青木孝子

鑑賞  
駄菓子屋に来た子供達は嬉しくて楽しくてしょうがない。そして、店の中にいた子猫を見つけて「かわいいね」「だかせて」「じゅんばんよ」と満面の笑みで集まっている。「声朗ら」の表現が巧みである。

傷つけられた猫のニュースがあった。小動物に触れ合うことで、子供達はまた一つ優しさを感じてくれたと思う。

## 俳句おだわら鑑賞

## 理事会日程

7 / 13 8 / 10 9 / 14

(毎月第2木曜日 けやき 15時開催)